宮澤賢治全集

9

筑摩書房

宮澤賢治全集第九卷

昭和四十三年四月二十五日初版第一刷發行

著者　宮澤賢治

發行者　竹之內靜雄

發行所　株式會社　筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三

印刷・精興社
製本・美行製本

目次

虔十公園林 …… 七
祭の晩 …… 一七
なめとこ山の熊 …… 二四
ざしき童子のはなし …… 三八
雁の童子 …… 四二
四又の百合 …… 五七
學者アラムハラドの見た着物 …… 六三
マリヴロンと少女 …… 七三
タネリはたしかにいちにち嚙んでゐたやうだった …… 七七

毒もみの好きな署長さん……八七
紫紺染について……九四
みじかい木ペン……一〇三
シグナルとシグナレス……一一三
氷河鼠の毛皮……一二四
ビヂテリアン大祭……一四六
一九三一年度極東ビヂテリアン大會見聞錄……一九四
二十六夜……二〇一
ひかりの素足……二二八
饑餓陣營……二五九
ポランの廣場……二七七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

植物醫師……二八七
種山ヶ原の夜……三〇三
後記……三二

宮澤賢治全集　第九卷

虔十公園林

虔十はいつも繩の帶をしめて、わらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいてゐるのでした。雨の中の青い藪を見ては、よろこんで目をパチパチさせ、青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けては、はねあがって手をたたいてみんなに知らせました。

けれどもあんまり子供らが虔十をばかにして笑ふものですから、虔十はだんだん笑はないふりをするやうになりました。

風がどうと吹いて、ぶなの葉がチラチラ光るときなどは、虔十はもううれしくてうれしくて、ひとりでに笑へて仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながら、いつまでもいつまでも、そのぶなの木を見上げて立ってゐるのでした。

時にはその大きくあいた口の横わきを、さも痒いやうなふりをして指でこすりながら、はあはあ息だけで笑ひました。

なるほど遠くから見ると虔十は口の横わきを搔いてゐるか、或ひは欠伸でもしてゐるかのやうに見えましたが、近くではもちろん笑ってゐる息の音も聞えましたし唇がピクピク動いてゐるのもわ

かりましたから、子供らはやっぱりそれもばかにして笑ひました。

おっかさんに云ひつけられると虔十は水を五百杯でも汲みました。一日一杯畑の草もとりました。けれども虔十のおっかさんもおとうさんも仲々そんなことを虔十に云ひつけようとはしませんでした。

さて、虔十の家のうしろに丁度大きな運動場ぐらゐの野原がまだ畑にならないで殘ってゐました。

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新らしい草も芽を出さない時、虔十はいきなり田打ちをしてゐた家の人達の前に走って來て云ひました。

「お母、おらさ杉苗七百本、買って呉ろ。」

虔十のおっかさんは、きらきらの三本鍬を動かすのをやめて、じっと虔十の顔を見て云ひました。

「杉苗七百ど、どごさ植ぇらぃ。」

「家のうしろの野原さ。」

そのとき虔十の兄さんが云ひました。

「虔十、あそごは杉植ぇでも成長らない處だ。それより少し田でも打って助けろ。」

虔十はきまり悪さうにもぢもぢして下を向いてしまひました。

すると虔十のお父さんが向ふで汗を拭きながらからだを延ばして、

「買ってやれ、買ってやれ。虔十ぁ今まで何一つだて頼んだごとぁ無ぃがったもの。買ってやれ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と云ひましたので虔十のお母さんも安心したやうに笑ひました。
虔十はまるでよろこんですぐにまっすぐに家の方へ走りました。
そして納屋から唐鍬を持ち出して、ぽくりぽくりと芝を起して、杉苗を植ゑる穴を掘りはじめました。
虔十の兄さんがあとを追って來てそれを見て云ひました。
「虔十、杉ぁ植る時、掘らないばわがないんだぢゃ。明日まで待て。おれ、苗買って來てやるがら。」
虔十はきまり悪さうに鍬をおきました。
次の日、空はよく晴れて山の雪はまっ白に光り、ひばりは高く高くのぼってチーチクチーチクやりました。そして虔十はまるでこらへ切れないやうにニコニコ笑って、兄さんに教へられたやうに今度は北の方の堺から杉苗の穴を掘りはじめました。實にまっすぐに實に間隔正しくそれを掘ったのでした。虔十の兄さんがそこへ一本づつ苗を植ゑて行きました。
その時野原の北側に畑を有ってゐる平二が、きせるをくはへてふところ手をして寒さうに肩をすぼめてやって來ました。平二は百姓も少しはしてゐましたが、實はもっと別の、人にいやがられるやうなことも仕事にしてゐました。平二は虔十に云ひました。
「やい、虔十、此處さ杉植るなんてやっぱり馬鹿だな。第一おらの畑ぁ日影にならな。」
虔十は顔を赤くして何か云ひたさうにしましたが云へないでもぢもぢしました。
すると虔十の兄さんが、

「平二さん、お早うがす。」と云って向ふに立ちあがりましたので、平二はぶつぶつ云ひながら又のっそりと向ふへ行ってしまひました。

その芝原へ杉を植ゑることを嘲笑ったものは決して平二だけではありませんでした。あんな處に杉など育つものでもない、底は硬い粘土なんだ、やっぱり馬鹿は馬鹿だとみんなが云って居りました。

それは全くその通りでした。杉は五年までは綠いろの心がまっすぐに空の方へ延びて行きましたが、もうそれからはだんだん頭が圓く變って七年目も八年目もやっぱり丈が九尺ぐらゐでした。

ある朝、虔十が林の前に立ってゐますと、ひとりの百姓が冗談に云ひました。

「おおい、虔十。あの杉ぁ枝打ぢさないのが。」

「枝打ちていふのは何だぃ。」

「枝打ぢつのは下の方の枝、山刀で落すのさ。」

「おらも枝打ぢするべがな。」

虔十は走って行って山刀を持って來ました。

そして片っぱしから、ぱちぱち杉の下枝を拂ひはじめました。ところがただ九尺の杉ですから、虔十は少しからだをまげて、杉の木の下にくぐらなければなりませんでした。

夕方になったときは、どの木も上の枝をただ三四本ぐらゐづつ殘して、あとはすっかり拂ひ落されてゐました。

濃い綠いろの枝はいちめんに下草を埋め、その小さな林はあかるくがらんとなってしまひまし

た。

虔十は一ぺんにあんまりがらんとなったので、なんだか氣持が悪くて胸が痛いやうに思ひました。

そこへ丁度虔十の兄さんが畑から歸ってやって來ましたが、林を見て思はず笑ひました。そしてぼんやり立ってゐる虔十にきげんよく云ひました。

「おう。枝集めべ、いい焚ぎものうんと出來だ。林も立派になったな。」

そこで虔十もやっと安心して、兄さんと一緒に杉の木の下にくぐって、落した枝をすっかり集めました。

下草はみじかくて奇麗で、まるで仙人たちが碁でもうつ處のやうに見えました。

ところが次の日、虔十は納屋で蟲喰ひ大豆を拾ってゐましたら、林の方でそれはそれは大さわぎが聞えました。

あっちでもこっちでも、號令をかける聲、ラッパのまね、足ぶみの音、それからまるでそこら中の鳥も飛びあがるやうな、どっと起るわらひ聲、虔十はびっくりしてそっちへ行って見ました。

すると愕ろいたことは、學校歸りの子供らが五十人も集って、一列になって歩調をそろへて、その杉の木の間を行進してゐるのでした。

全く杉の列はどこを通っても並木道のやうでした。それに青い服を着たやうな杉の木の方も、列を組んであるいてゐるやうに見えるのですから、子供らのよろこび加減と云ったらとてもありません。みんな顔をまっ赤にして、もずのやうに叫んで杉の列の間を歩いてゐるのでした。

その杉の列には、東京街道、ロシヤ街道、それから西洋街道といふやうにずんずん名前がついて行きました。

虔十もよろこんで、杉のこっちにかくれながら、口を大きくあいて、はあはあ笑ひました。

それからはもう毎日毎日子供らが集まりました。

ただ子供らの來ないのは雨の日でした。

その日はまっ白なやはらかな空から、あめのさらさらと降る中で、虔十がただ一人からだ中ずぶぬれになって林の外に立ってゐました。

「虔十さん。今日も林の立番だなす。」

蓑を着て通りかかる人が笑って云ひました。その杉には嵩色の實がなり、立派な綠の枝さきからは、すきとほったつめたい雨のしづくがポタリポタリと垂れました。虔十は口を大きくあけて、はあはあ息をつき、からだからは雨の中に湯氣を立てながら、いつまでもいつまでもそこに立ってゐるのでした。

ところがある霧のふかい朝でした。

虔十は萱場で平二といきなり行き會ひました。

平二はまはりをよく見まはしてから、まるで狼のやうないやな顏をしてどなりました。

「虔十、貴さんどどの杉伐れ。」

「何してな。」

「おらの畑ぁ、日かげにならな。」

虔十はだまって下をむきました。平二の畑が日かげになると云ったって、杉の影がたかで五寸もはいってはゐなかったのです。おまけに杉はとにかく南から來る强い風を防いでゐるのでした。

「伐れ、伐れ。伐らないが。」

「伐らない。」虔十が顏をあげて少し怖さうに云ひました。その唇はいまにも泣き出しさうにひきつってゐました。實にこれが虔十の一生の間のたった一つの人に對する逆らひの言葉だったのです。

ところが平二は、人のいい虔十などにばかにされたと思ったので、急に怒り出して肩を張ったと思ふと、いきなり虔十の頰をなぐりつけました。どしりどしりとなぐりつけました。

虔十は手を頰にあてながら默ってなぐられてゐましたが、たうとうまはりがみんなまっ靑に見えて、よろよろしてしまひました。すると平二も少し氣味が惡くなったと見えて、急いで腕を組んでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまひました。

さて虔十はその秋チブスにかかって死にました。平二も丁度その十日ばかり前に、やっぱりその病氣で死んでゐました。

ところがそんなことには一向構はず、林にはやはり毎日毎日子供らが集まりました。

お話はずんずん急ぎます。

次の年、その村に鐵道が通り、虔十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀨戸物の工場や製絲場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰れて家がたちました。いつかすっかり町になってしまったのです。その中に虔十の林だけは、どう云ふわけかそのまま殘

って居りました。その杉もやっと一丈ぐらゐ、子供らは毎日毎日集まりました。學校がすぐ近くに建ってゐましたから、子供らはその林と林の南の芝原とを、いよいよ自分らの運動場の續きと思ってしまひました。

虔十のお父さんも、もうかみがまっ白でした。まっ白な筈です。虔十が死んでから二十年近くなるではありませんか。

ある日、昔のその村から出て、いまアメリカのある大學の教授になってゐる若い博士が、十五年ぶりで故郷へ歸って來ました。

どこに昔の畑や森のおもかげがあったでせう。町の人たちも大ていは新らしく外から來た人たちでした。

それでもある日、博士は小學校から頼まれて、その講堂でみんなに向ふの國の話をしました。

お話がすんでから博士は校長さんたちと運動場に出て、それからあの虔十の林の方へ行きました。

すると若い博士は、愕ろいて何べんも眼鏡を直してゐましたが、たうとう半分ひとりごとのやうに云ひました。

「ああ、ここはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ。木は却って小さくなったやうだ。みんなも遊んでゐる。ああ、あの中に私や私の昔の友達が居ないだらうか。」

博士は俄かに氣がついたやうに笑ひ顔になって、校長さんに云ひました。

「ここは今は學校の運動場ですか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com